
ホスト

レオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホスト

【Nコード】

N3314A

【作者名】

レオン

【あらすじ】

夜の街でホストとして働く男のストーリー。愛子という客に出会う事で麗は成長していくのだが・

第一話 麗

二人ベットのうえで

自分の居場所ってなかなかないよね

麗は唐突に愛子にいった。

「え、なに？」

愛子が麗の顔を小さく覗き込んだ。

「うん。落ち着くところってないよね、っていったんだ」

「居場所？」

「そう」

「そんなの在るわけじゃないじゃない」

「そうかな」

突然とりとめのない思考が脳裏を横ぎった。在ることはないのであろつか。有るは無いのであろつか。

しかし話の流れと自分の思ったことは何らこの場で関係がないように感じられた。

麗はもう一度尋ねた。

「そうかな」

「そうよ。在るわけないって。そんなのあつたら桃源郷よ」

「なんだそれ」

「探したってないから桃源郷」

「だから桃源郷の意味」

「知らないわよ、そんなこと。すてきな所って感じはするけど」

麗が苦笑した。口調から察するに勝気な性格なようだ。しかも意味もよく判ってないことを平気で口に出して喋る。B型か。だが桃源郷のすてきな所といった愛子の言葉は妙に的を得ている気がした。麗が幼少のころから漠然と抱いていた自分の居場所という意味の核心に微妙に触れた感があった。

愛子とは今日始めて店で会い、そして今日始めて肌をあわせた。

店で仕事として接客し、店が終わってアフターで食事をし、酔いも醒めままぬやらただ流れて、寝た。特別な感情など少しもなかった。

麗は苦笑を微笑にうつすら切り替えながら言った。

「探してみたいものだ桃源郷」

「だから探したつてないのよ。そんなものは。気がついたら在るもののよ、居場所なんて」

「なんか日本語おかしくないか」

「そう？」

愛子が無邪気な顔で微笑んだ。麗は愛子をふと見つめた。凝視に変わった。

「麗の居場所はこと、ここよ」

愛子が自分の胸と股を指さしていた。右手は胸を軽く圧迫し両方の乳首を隠すように、左手はその産毛のような柔らかい質感のアンダーヘアを手の平で、そつと隠していた。

腹部には麗の放出した精液がだらしなく散っていた。愛子の顔と腹部の白濁を交互に見やる。

愛子のその微笑には包容があつた。その微笑には見事な包容力があつた。自制を働かせないと吸い込まれそうになる衝動を覚えた。たいした科白を交し合つたわけではない。

ただ二人ホテルの薄汚れた軋むベッドの上でシートにくるまり体を寄せ合っているだけだ。その体の表面は二人の性交の余韻醒めやまぬ火照りが微かに残っているだけだ。愛子の腹の上には麗の投げ出した残滓が乳白色にこびり付いているだけで、しかもそれは乾きかけてすらあつた。それだけが麗にとって現実味を帯びたものにしていて。行為の後の投げやりに近い倦怠だけが麗を支配する現実だけが確固たるものとなっていたのだ。

それなのに。

今や愛子は母なる大きな愛で麗を包み込もうとしていた。なかばそれにあがらうとする麗の抵抗力も、愛子にとっては握り潰し包括

するのも容易いことのようにであつた。その愛は強圧的ですからあつたが、麗自身それにのめり込むことで得られる、快か不快か微妙なところではあるが耐えること自体には快を催すのを知っていた。依存に近い迎合であつた。

麗は隣でたたずんでいる愛子を引き寄せ腕枕をしてやつた。髪を撫でながら思う。

この子はズルイのかもしれない。

「聞こえてるわよ」

「え」

「独り言」

「言つてたか、独り言」

愛子の顔は一変していた。その瞳にはくぐもりの色が垣間見えた。愛子の黒目がちな瞳の陰にはなにか冷たいものが一瞬宿つたのを麗は見逃さなかつた。たかが独り言ではないか。そこまで過敏に反応を示すほど大げさなものだろうか。苛立ちの兆しが胸元をせりあがり麗は曖昧に視線をはぐらかした。ズルイっていう独り言はまずいよな。

天井に目を向けると壁と交わる角のところにクリームとも薄茶ともいえるようなまだら状の染みが附着していた。煙草のやにだろうか。やに。脂の附着。まだらの脂の悲着。まだらの脂は麗自身を包み込む皮膜のようなものだ。皮膜は麗の顔全体を覆っている。薄皮一枚、脂が顔表面をのっぺりとだらしなく乗っている。突然苛立ちの兆しは急速に萎みはじめ、羞恥が代わりに入れ替わつた。

麗は時々思つたことを口走ることがあつた。しかし、それが癖であるといった日常生活まで浸透している自覚はあまりなく、周りにそれとなく注意されることもあるが別段気にもしていなかつた。ほかに気にすることなど日々の仕事でも私生活でも山のようにあるからだ。優先順位が違つた。

だが愛子にそれを指摘されたとき麗の中で激しい羞恥がチリチリ這いずりあがり、同時に嫌悪すら覚えた。この狡賢い女に自分の孤

独を見透かされた気がしたのだ。この女は鋭い直観で心の奥底を覗き込む。驚くほどの包容を見せるかと思えば、次の瞬間には冷たく足蹴にする。極端な二面性があるのではないか。ひどく投げやりな倦怠が麗に押し掛かってきた。なんだか面倒な女じゃないか。極端な二面性は人を振り回し疲れさせるものだ。男を良く知る女。そういう女は男の本質を見抜く。

しかし・・思い過ごしかもしれない。考えすぎだ。ここまで思案して今さらだが愛子は麗がひたすら感傷的になっているのにも気づいてないのではないか。

愛子の顔をチラと見やると、ただ、ただ、拗ねた表情が伺えた。妙に照れを含んだそのまるっこい額は幼くも可愛らしく思えた。やはり俺の勘違いか。

失笑した。俺の一人舞台だ。あれやこれや勝つてに分析して一人で一喜一憂して踊っている。辺りをブンブン飛び回る蠅のようではないか。揉み手をする蠅は小賢しくて鬱陶しい。だが思い過ごしにしても、麗は早くも一人になりたい孤独を覚えていた。

麗は複雑な心情を押し殺して愛子に向き直った。

「怒っているのか」

「別に」

返す言葉がなくて麗はだまって宙を見つめた。麗のさまよう視線を愛子が追う。そしてかぶさるように体を密着させてきた。

「私ってズルイ？」

「悪かった。ただ愛子の表情に見惚れていたんだ」

「ふーん。意味分かんない」

「いや、俺たまに独り言をするときがあるらしいんだ。軽蔑されたかなって思ってた」

「んなことあるわけないじゃん」

「そうか、良かった」

密着しているせいで乾きかけではあるが、ねっとりとした質感を残す精液が腹にまとわりつく。自分の体液だが、いざ我が身から

放たれると汚物にしか見えない。粘液であるがゆえになおさらだ。

それにしてもなぜ愛子をズルイと思ったんだろう。

と、言うよりも、基本的に女はズルイ部分があると麗は思っている。そして自覚がない。自覚がないだけにタチが悪い。男はそれに喜んで騙される。いや、騙されていると薄々知りつつも嬉々として騙されてあげるのだ。女はそれを見て騙してあげる。心のなかで舌をだして。フェフティフェフティ。ケースバイケース。イーブン。騙し騙され。海千山千。男だってズルイのだ。ただその側面は男のすべての行動の基盤になっている単純さがある。

少なくとも麗の属している世界はそうであった。そう見えた。そう感じた。そう思うのだからしょうがない。自らその世界に足を突っ込んだのだ。見てみたかった。そのすべてを。溺れてみたかった。二度と水面の淵に浮上できないほどに。染めてみたかった。自分を嘘と虚栄の世界に。汚れたかった。自分を汚したかった。面接を受けた動機はただそれであった。また、そうせざるを得ない事情もあった。

ズルい。ズルイ。狡い。それにはあからさまに人間の本質が隠されている。本質そのもの、すべてが。見事に狡さを露見する愛子が憎たらしくも可愛らしい。可愛らしい裏には恐ろしいほどの猛毒が含まれているのだ。触れたら間違はなく火傷する。皮膚は捲れただけで、傷は治癒するのに時間がかかるだろう。

驚いた。結局は愛子を勝手にこうだと決めつけている。しかし愛子の性格を確定するには、まだ微妙な位置であやふやなところではあるが、触れてはならぬものがある。なぜだか、直感がそう告げていた。

麗は愛子とはあまり時間を共にするべきではないと感じた。

「なあ、この後どうしようか」

「え、来たばっかじゃん。眠たいよ」

「うん、どっか行きたいとこないかなって思っ」

「マジ？どこ連れて行ってくれんの？」

打ち解けた様子で返してくる。口調が妙に馴れ馴れしくなってきた。この時点で麗は愛子と距離を置こうと思った。深入りは禁物だ。つかず離れずでも愛子は店に来るだろう。そして二度と抱く事はない。しかし恋人のフリはする。それが客を引っ張るコツではあるからだ。騙すのではない。客もそれを知っている。それがホスト。

断言する。金を払って疑似恋愛をする。その相手がホストなのだ。それをそつなくこなす役目が職業的に麗の属している体制なのだ。お金をあげるからあなたのサービスをちょうだい。愛をちょうだい。少しでもいいから夢を与えてちょうだい。それに見合うお金をあげる。だから優しくして……。そう、だから麗達ホストは身体を張る。飲めない酒を無理に肝臓に叩き込み、トイレに行っては便器に胃の中の物を吐き出し、何食わぬ顔で席に戻り、笑顔で接客する。

酒を飲み肝臓を腫らして便所に駆け込み嘔吐し笑顔で接客。

酒をがぶ飲み肝臓酷使駆け足便所で駆け足笑顔でボックスに。それの繰り返し……。

文字通りからだを張る。すべては金という拝金主義者のもとに経済のシステムが成り立つ世界。金を得るために我が身を切り売りする。

それも分からぬような奴は金を払う資格もない。店に来る資格もない。

「どこに行きたい？」

「んーキャナル」

「映画でも見ようか」

とりあえずこのホテルを出ようと思った。適当にぶらついて切りがいいところで愛子と離れよう。早く寮に帰って寝てしまいたい。

「出ようか」

「準備に30分」

早くしろ。じゃないとベッドでこのまま寝てしまう。俺はまどろんでしまう。そうになったら俺とお前は男と女の関係になってしまう。麗はシーツをまくりあげバスルームに向かった。体は睡眠を欲し

てるが、倦怠を無理やり叩き起こす。惰眠を貪りたい。だがここで負けるわけにはいかない。客として引つ張れるか勝負の分れ目だ。さっさと熱いシャワーを浴びて目を覚ますに限る。

湯のコックをひねる。適温に調節する。脳が覚醒してゆくのがわかった。腹とわき腹に附着した精液を洗い流す。意識が完全に近い程度にはつきりとしてきた。覚醒したとたん後悔した。俺は馬鹿だ。なぜ愛子と寝た。あいつは完全に俺に情を抱いている。

もちろん店にいる時から愛子は麗に情を抱いていただろう。しかしセックスをしたあとでは、あきらかに情の質が変わってしまう。できれば浮遊感ただよう曖昧模糊とした好きなのか嫌いなのかといった感情を愛子には持たすべきだった。女は好意をもった相手といったん身体を交わらすと独占欲を露にし嫉妬を平気で表面に出すようになる。そうなると扱いが難しく面倒になる。面倒は嫌いだ。鬱陶しいからだ。投げやりな気持ちになる。怠慢は危険だ。俺の性格からして最悪すべてをなげだす可能性がある。現実的なことを言う俺には家がない。帰る家がない。寮はあるが所詮タコ部屋だ。野郎どもが布団一枚分のスペースをあてがわれ雑魚寝している密室空間だ。プライベートもクソもない。その息苦しさは殺意的ですらある。居場所ではない。早く出たい。そしてこのホテルからも。桃源郷なんて無い。

このホテルからも・・・俺は捕らわれの身なのか。あまりに幼稚で大げさな考えに苦笑した。苦笑はそのまま泣き笑いに変わった。俺は何から逃げ出そうとしているのだ。愛子からか？世間からか？それとも自分からか？答えは出ない。わからない。わかつともしない。考える気力すらも喪したようだ。なぜ愛子と寝た。あいつに会ってから俺は調子が狂っているのではないか。だが一つだけ言える事がある。

俺は束縛されたくない。何者からも。誤解されても孤独と引き換えでも自由でありたい。自由は力だ。俺という人間を形成しているのは本質的に誰であろうと束縛しえない自由という象徴なのだ。だ

が今は耐える。麗を取り巻く体制からも女からも。

そう思った。なぜかそこまで麗は考えた。なかば何かに追い詰められた感もあった。ひどく投げやりな気分だ。

どうでもいい気持ちを押さえ込んで麗はタオルを身にまとった。自分の気分の変化しやすい心境に苛立ちを覚えながら身体をこしこし拭いた。さっきまでは愛子に対してやさしい気持ちになれた一瞬があった。安心すら覚えようとした。だが独り言を聞かれた次の瞬間には自意識がひどく傷つき、店を終えてから寝てないことも手伝い、疲れに似た倦怠が激しく襲ってきた。栄養ドリンクでも飲みたい気分だ。

いい加減バスルームから出ると愛子と視線が合った。顔の筋肉を総動員して笑顔を作り出す。愛子がなぜかハツとした表情を見せた。

「さっぱりした。準備出来たか」

「・・・綺麗」

「え？」

「あ、ごめん。麗君って本当に整った顔してる」

「何言ってるんだよ」

「だって体つきとかも彫刻されたみたいに・・・」

そう言って愛子はバスルームに駆け込んだ。なんだよ、あいつ。

化粧もして服も替えてたのに今から風呂入るの？

麗は呟きながらスーツをたぐり寄せた。

第二話 愛子

愛子

今、私の隣には麗と一緒に歩いてる。あの麗が。夢のようだ。私は今、とっても夢心地で足元がフワフワしてる。

ふと麗の横顔を見る。なんだか気だるそうに、でもその整端な顔つきは崩れをまるで知らない。私の視線を感じて麗がチラツと流し目を与える。あまりにもセクシーすぎて私は息が止まりそうになる。あわてて、ちよつと怒った顔を無理に作って数歩だけ後ろに下がる。どうした？麗が軽い笑みを浮かべて私を窺う。別に、ホントはだるいんでしょ、などと嘯いて呟く。麗は困った顔をして苦笑する。麗の笑みはなんだか照れが入り混じってて可愛らしい。その笑顔を見ると私はなんともいえない気持ちになる。麗のすべてを許容したくなる。でも麗の顔からこぼれる笑みはどこか切なさが漂う……。私はちよつとだけ悲しくなつて寂しくなる。心の中に悲しみが膨らんで麗をそつと抱きしめたくなる。守ってあげたい、そんな思いに唐突に捕らわれてしまう。だけど守ってあげようとするやうと麗はするつと私の手から離れていく。そんな気がする。

「映画なに見たい？」

気を取り直して麗に尋ねた。私は甲斐甲斐しく麗の三歩後ろを付いている。

「んー土曜の昼だし映画込んでるかもな。とりあえず飯でも食うか」

「じゃパスタ食べたいな。キャナルも美味しいところあるし、それからなんか見ようよ」

「ご飯食べたら麗はとつと帰っちゃうんじゃないか、そんな気がして私は先回りして言った。」

麗はしばし考えこんで、オッケーいいよ、と小さく呟いた。なん

だか疲れてる？申し訳ない気持ち軽い焦りと共にせりあがる。

ごめんね麗。もう少しそばに居させて。あなたの存在をちよつとも感じていたい。あなたの空間と一緒に分ち合いたい。あなたの空気を一緒に吸いたい。そして麗の吐く息を私は飲み込む。あなたから吐き出される全てのものを絡めとる。全ての……。私は飲みたかったの。

ハッとした。思いが早くもよからぬ方に傾いていることに気づいた。何を考えてるの。思わず一人で顔を赤くする。

麗と居ると身体に疼きが駆け抜ける瞬間がある。なんというか身体の内側に痺れに似た微弱な電気が流れるような。うまく説明できないけど、その痺れがある部分に到達すると、ジュン、となってなにか暖かいものが私のなかに光となって拡がる。

そんな経験を私は今まで知らなかった。大げさに言うと、私はその疼きを知る為に、疼きで得られるどちらかというと快感にも似た内側で拡がり拡散する光源を得る為に、麗に出会ったような気がする。いや、大げさではない。それは私の真実だ。

だってこれまでの男はダメ男ばかりだった。正確に言うと今までの男達を別にバカとかダメとかはつきり認識してた訳じゃないけど麗に会って解った。理解した。何かが違うのだ。何が違う、とははつきり言えない。

漠然、とだけ麗には意志があるのではないか。それは強くて弱い意志。硬くて脆い意志。決して人間的に向上しようとか善い行いをしようとかの偽善臭いものではない。どちらかといえばアウトロ―側に近い独善的な理念、倫理。本質は強固で揺ぎ無いがその回りは薄くて心もとない膜。こうありたいと狂おしく願うのに状況がそれを許さない。何を願っているのかは知らないけれど、その質は他の男とは違う何かがある。そこに可能性とかの楽観的な希望観測の匂いは感じない。けどその匂いは私と同質のものだ。たぶん走り出すと止まらなくて行き着く所は闇。闇なのに私は光を感じる。光を感じてその甘さを噛み締める。光は闇を溶かして覆い尽くし私に生

きるといふ生命の喜びを与えるの。細胞の一個一個があなたを求めてやまない。

もしかして、これは・・愛？これが言葉という人間以上にあやふやなものを翻訳すると、愛ということなの・・かな。

そつと呟く。愛。愛子。

私は気づいた。愛子という名前でありながら愛を知らなかったことに。

強烈な皮肉だ。麗は私のことをズルイと言った。きっと私の愛の気配を敏感に感じ取ったんだ。

愛で麗の心に絡み付こうとした。それも無意識に。

だから麗はズルイと言った。

麗は私の本質を見た。

私の愛を見た。

そして貫いた。

驚愕した。まるで雷に頭頂部を直撃されたような衝撃を受けた。

突然天啓が降ってきた感があつた。まぎれもなく愛を実感した瞬間であり、それは麗を飲み込まんとする自分の貪欲さに気づいた瞬間でもあつた。同時に貪欲を嫌悪ではなく許容で自分に受け入れている瞬間ですらあつた。そして麗の直観。明らかに私を見抜いている。

瞬きする間もなく麗を見つめた。視線に気づかない。それでいい。私はあなたを見つめ続ける。あなたが私を闇で照らし続ける限り。そこに私は在るの。

*

麗と初めて会ったのはギャルソンっていう店名のホストクラブだった。最初は友達の恵美に無理やりに連れて来られた。ホントは行きたくなかったけど恵美のお目当ての男の子に会わせたいらしく、ま、二人の仲を当てられてやろつかぐらいの気持ちでしぶしぶ店に出かけたのだ。まあ、その時点ではホストに興味がなかった。なにやら中州の風俗専門の雑誌をパラパラめくって見てみたが、たいし

た男が載ってなかったのも事実だ。顔がイイ男も何人か掲載されているようだ。タイプでもない。

と、いうよりも私は少し醒めてるのかもしれない。物事に対していや男に対して？。なぜなら私は風俗嬢でヘルスの女の子。ある意味、何人も何十人も男を知ってる。それどころじゃない、ざっと三桁はクリアしてる。はつきり言うとな男の顔を見るのも嫌。毎日顔見るし、毎日言い寄られるし、毎日生でアレを啜えるのよ。しかも不特定多数。いいかげんにしてほしいわ。うんざりだけど仕事だから頑張るけどね。

つづける理由はただ一つ。

もちろん金。

ほかになにが必要だというの。それしか在り得ない。信じるものが金だけなんてのもちよつと悲しいのがあるけども。けどたった一つでも信じるものがあるだけ幸せよ。私はそう思っ生きてきた。より所がなきゃ倒れちゃう。私という人間は崩れちゃうのよ。

第三章 ギャルソン

友達の恵美とギャルソンの扉を開けて店内に入るとまず黴臭い匂いが鼻を突いた。あるいは水商売独特の匂いと言おうか。そのよほどでさえいる空気の漂いは愛子の店と同質のもだった。しかし小規模な店にありがちで特殊なその匂いはどこか許容できる範囲のものであった。周りに気づかれないように店内の空気をそつと鼻腔に充たす。ふと、懐かしさに近い親近感が胸の裡にわいた。店内は薄暗く、目を凝らして辺りを一瞥するとカウンターと小さなボックス席が壁にそって三つ並んでいるだけの小さな店だと分かった。

従業員が気づいて、いらっしやいませ、と声をかけてきた。おしぼりを受け取りボックスに移る。ストロー付きでウーロン茶を頼んだ。

恵美がカウンターでマスターらしき者と雑談を交わしている。親しそくに喋っているのを見ると、よほどの常連なのか。そんなフィンを覗えた。よく見るとマスターを含めて従業員は三人しか居ないようだ。しかしこの店の規模では十分だ。客も入れたら七、八人もおれば満席だろう。現時点で客は二組しかないが、それでも店内は賑わっているように見える。

「麗は今日、同伴なんだって」

愛子の隣に座った恵美が少し口を尖らせながら言った。

「麗？」

「うん。私が結構気に入っている子」

「ああ、麗って言うんだその子」

「そう。めっちゃクール顔してんだけど可愛いんだ」

「分かる。ギャップね」

以外と冷静に答えた。なぜそんなに男にハマルのか。しかもホストに。

「そうなのよ、外見と中身の差が激しいほど私、燃えちゃうのよね」

燃える……。気持ちが燃え上がるのだろうか。私は異性に対してそれほど気持ちが高ぶったことがない。ただの高飛車なのかしら。愛子は店の中を見渡した。感覚に引かかるような男はいない。なぜか少し悔しい気がした。

「どうしたの」

恵美が愛子の顔を覗きこんだ。

「あ、ごめん。ってか恵美もう狙い定めちゃってるんだ？」

気を取り直して聞いた。メンソール煙草を取り出して火をつける。煙を深く吸い、溜めて、吐いた。何か苛立ちが心の隅にある。

「えへへ。なんていうか、あの子ものすごく独占したくなるのよね。自分だけの物にしたいっていうか。こう、胸がキュンってね」

そう言って恵美が両手で胸を軽く揺らした。羨ましい、恵美は華奢な体つきの割りには胸にボリュームがある。

「ふうーん」

ウーロン茶を気だるそうにストローで掻き回しながら答えた。グラスの中の氷が溶けてコトンと音をたてる。そして沈黙。煙草の煙が辺りを少し湿らせる。

「なにかエッチな相談事かなあ？」

タイミングを計ったかのようにマスターが席に着いて来た。ただし愛子達はボックスだがマスターは丸椅子に座る。

丸椅子とはボックスとテーブルを挟んで対面するときに使う円形状の一人用の椅子である。もちろん背もたれは無い。基本的に客と従業員はボックスに並んで一緒に座る事を禁止されている。客の隣に座っていいのは指名された従業員だけで、例外として店を仕切る者としてマスターはどこでも座っていい事になっている。つまり、どこでも円滑に移動し接客して潤滑油のような役割を果たし、かつ店内を監督してコマのように従業員を動かせるためにだ。

「はじめてですよ。ストローで飲む人。んでアルコールなし。も

しかして、お酒弱いの？」

茶化すように笑顔でマスターが言った。

「あ、いえ。実は恵美に無理やり連れて来られたんですよ。あまり興味がないもので。すいません、こういう世界ってなんだか怖い気がして」

愛子は正直に言った。これを飲んだら帰ろう。そう思っていた。グラスは空になりかけていた。酒は強いほうだ。しかし今夜は気乗りがしなかった。

隣では恵美が目丸くして愛子を見つめていた。

「あ、氷」

マスターが気を利かして言った。

「同じものでいいよね？ごめんね気が付かなくて」

尖りかけた空気を和ますようにマスターは笑顔でグラスにウーロン茶を注ぎ、氷を入れて優しく掻き回す。見事な笑顔だ。マスターたる所を見た気がした。しかし先ほどの笑顔とは微妙に違う。どう違うのか分からないが笑顔を使い分けるマスターの計算高さを感じた。

マスターの指示で二人のヘルプがテーブルに着いた。愛子の低いテンションにも関わらず、二人のヘルプはテキパキとにこやかに愛想を振りまきながら彼女達の接客をしている。しだいに気分が解れていくのが分かった。彼らは接客業というサービスのプロなのだ。

そこには徹底した従業員への教育の姿が窺えた。そのような姿勢を積極的に指揮しているのは少なくとも本質的にマスターではない。このギャルソンという店は背後に親不孝通りの範囲に限ってだが、バブルグループという派手な会社名の組織が運営している。組織が運営するナイト系列の店は、福岡は親不孝通りに約十店舗を数える。最近の名前の由来どおり、濡れ手に粟といった世間のバブルの流れで売り上げを順調に伸ばしている組織といえた。

福岡一の繁華街である天神の北西に位置する親不孝通りは、昭和通を挟んで西通りと直結している。長さにして約三百メートル、徒

歩五分ぐらいの距離の親不孝通りは尽き当たりに専門学校があることからその名前が付いた。学生が学校にも行かず親のすねをかじりながら夜は酒をかつくくらい跋扈する繁華街。文字通り親不孝な若者が集まる喧騒の街。ちょうど通りを境に天神、舞鶴地区に区分される地点でもある。カラオケと居酒屋が集中過多気味のその通りを中心に十代の若者が押し寄せるのだ。週末の夜ともなれば辺りは歩くのも困難になるほど人、人、人の大群である。

しかし愛子はなぜ人間がこの街に集まるにかよく分からなかった。そんなに寂しいのか。愛子から見たら、寂しくて孤独を紛らわす為に人間が集まっているようにしか映らなかった。それはひいき目に見ても人間の持つ弱さにしか感じられなかった。なぜ群れたがる。群れなければ何もできない人たち。愛子はそう思っていた。金がすべてよ。自分を短絡的だとも感じるが、そう思うのは性格だと諦めていた。

仕事に貴賤はないとよく巷では言われるが、愛子は自分のやっている仕事に対してブルーカラー特有の肉体労働であるとはつきり自覚していた。店にやって来る客達は愛子に、いや在籍している自らの身体を使って収入を得ている彼女達に、たいがいは蔑みの色を瞳に宿してそれを隠そうともせず鷹揚な態度で接する輩も少なくない。金を払っているのだからと強引に身体を重ねようとする奴もいる。そのくせ小心者が多くてどこかで一杯引つ掛けて酔いに任せて行為を行おうとするのだ。

そんな客を愛子は長年店で働いている内に自然に見分けられるようになった。酔いという脳の中の理性を麻痺させて狼藉を働く者達を愛子はごく自然にかわすことができるし、受け流す術も心得ていた。だがそうじてそれは自尊心を酷く傷つけるものでもあった。恥を知れと客に毒ずきたいが、それ以前に自分が恥じを知るべきだといつも思っていた。この仕事に従事する事に心の表面化に強く表れるほど恥ていた。意識していた。

つまり向いてなかったのだ。にもかかわらずある種の開き直りと

金に対する執着から現状を維持しつづけているのだ。さらにそれに対して罪悪感とも言うべき羞恥が激しく押し掛かり愛子をさらに痛めつける側面があった。その痛みはなぜか快と紙一重なところがあってその痛みと快を行ったり来たりしてるうちに同じ店に5年も在籍していた。

人の移り変わりは激しい。たくさんの人が愛子の横をすり抜けていった。たくさんの人間が辞めていき、ある者はより給料のいい店に移っていった。

そのなかで5年も同じ場所にいる愛子は確かに特殊な存在ではあった。店としてはそんな愛子を重宝した。信用され無断欠勤もなくノルマもきつちりこなす愛子に店側は破格の収入を約束している。待遇が良い、あるいは都合が良い、という理由で重苦しい痛みに耐えながらも、しかし痛みは悲しみに拡がり収束することがないにも関わらず、痛みと悲しみの中に快を見つけることを獲得して愛子は日々に埋没してゆく。

またそんな痛みも長い日々の間に削られて行き感覚が麻痺すらしてきて磨耗しているのだ。すなわち快すらも遠のいていく。無感覚とも言うべき日常が愛子を蝕みかけている時であった。

「大丈夫？」

啞え煙草をしたまま恵美が言った。同時に店のテクノ調のBGMが愛子の耳にうつすらと入り込んできた。

我に返った。

「ごめん。ぼーっとしてた」

どうやら考え込んでしまったようだ。

「たまにあるのよねえ。愛子って、よく安心してんの」

「疲れてんじゃない。恵美ちゃんと一緒の仕事してるんでしょ」

マスターが誰に聞くともなく独り言のように呟いた。

頷いた。恵美が引き取るように答えた。

「愛子はね、店のナンバーワンなんだよ。お客さんもたくさん抱えて忙しいもんね。一日の指名の量も半端ないしね」

ヒューツとテーブルから感嘆の声が上がった。マスターの目が一瞬、鋭く光ったように見えた。愛子はマスターを一瞥した。目が合ったがマスターは柔らかく視線を伏せた。舌打ちしたくなった。

「でもお金ないのぉー。私たちっ。ね？」

恵美がおどけて言った。愛子も「そうなのぉー」などと言っておどけて大袈裟に見せた。店内に笑い声がこだまする。

「麗はまだこないのかぁー」

酔いが回り始めた恵美が拳を振り上げた。ちょうどその拳がグラスに当たった。中身がこぼれた。ビールだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3314a/>

ホスト

2010年10月28日08時15分発行